源内とかっぱ

山形県

むかし、源内という男がいました。源内は、最上川の青くすきとおった水がとろとろと流れる深い淵のそばに掘っ立て小屋を建てて、毎日あゆをつったり、かもをとったりして暮らしていました。背が高くてがんじょうで、力こぶなど石みたいにもりあがっていました。

ある晩のことです。源内は、いつものように、ふとんにくるまって、壁のすきまからちからちからと光る星をながめていました。すると、川のほうでかたらこたらと音がしました。

「はあて、なんだろう」

耳をすましていると、音はだんだん近づいて来ました。そこで、そっと起き出して、戸を少し開けてのぞいてみました。すると、黒い影が見えます。ようく見たら、かっぱでした。

「ははん、かっぱのやつ、川から上がって来たな」

源内は、知らんぷりして見ていました。

つぎの晩も、そのつぎの晩も、かっぱは上がって来ました。だんだんずぶとくなって、小屋のすぐそばまで来るようになりました。

「ははん、かっぱのやつ、おらにいたずらする気だな」

それでも源内は、知らんぷりして寝ていました。

ある雨のふるまっくらな晩に、かっぱはとうとう小屋の中までもぐりこんで来ました。

かっぱは、びしょびしょにぬれた手で、源内のおしりをひらっとさわりました。源内は、

「あ、つめたい」といって、いきなり立ち上がりました。かっぱは、小屋からたたたたっと走って出て、川の中にちゃぽらんとしずんでいきました。

「こりゃたいへんだ。かっぱのやつ、おらのしりこだまをねらっていやがる」

源内は、腕を組んで考えこみました。かっぱにしりこだまをぬかれると、たましいがぬけたみたいになって、深い淵の中に引きずりこまれてしまうと聞いています。しばらくして、源内は、いいことを思いついて、ぽんと手をたたきました。

つぎの晩、源内は、わざとふとんからおしりをつきだして寝ていました。真夜中にな

ると、かっぱが川から上がって来ました。源内は、わざと大きないびきをかいて眠ったふりをして待っていました。かたらこたらという音が小屋の外で止まり、かっぱが小屋の中にもぐりこんで来ました。そして、いきなり、源内のおしりにかぶりつきました。

　がりっ　がりがり　がりがり

そのおしりのかたいことかたいこと。かっぱの歯がぽろりぽろりとこぼれ落ちました。かっぱは、

「源内のしり、石しりこ。源内のしり、石しりこ」といって、泣きながら、川の淵までころころところがって、川の中にちゃぽらんとしずんでいきました。そして、二度と上がって来なくなりました。

　源内のおしりがどうしてそんなにかたかったかというと、大きな鉄びんのふたをおしりにはめていたからだそうです。

　おしまい

村上郁再話

資料『季刊民話２』民話と文学の会